

吉田修

よしだ・おさむ

京都大学医学部教授、奈良県立医科大学学長、紫綬褒章

経歴

生:昭和10年(1935年)3月1日、岡山県生まれ

昭和28年(1953年)3月	18歳	広島県福山東高等学校(現広島県立福山誠之館高等学校)卒業
昭和35年(1960年)3月	25歳	京都大学医学部医学科卒業
昭和36年(1961年)10月	26歳	京都大学医学部助手
昭和42年(1967年)6月～ 昭和48年(1973年)7月	32～ 38歳	京都大学医学部講師
昭和43年(1968年)12月～ 昭和45年(1970年)8月	33～ 35歳	アメリカ・ウィスコンシン大学医学部客員研究員(臨床腫瘍学講座)
昭和48年(1973年)8月～ 平成9年(1997年)10月	38～ 62歳	京都大学医学部教授(泌尿器科学講座)
昭和55年(1980年)	45歳	京都新聞文化賞
昭和60年(1985年)2月	50歳	高松宮妃癌研究基金学術賞
平成4年(1992年)	57歳	日本泌尿器科学会会長
平成5年(1993年)4月～ 平成9年(1997年)3月	58～ 62歳	京都大学医学部附属病院院長
平成5年(1993年)4月	58歳	京都大学大学院医学研究科教授(外科系専攻、器官外科学講座)
平成8年(1996年)	61歳	日本癌治療学会会長
平成9年(1997年)11月	62歳	京都大学名誉教授
平成9年(1997年)11月3日	62歳	紫綬褒章
—	—	日本泌尿器学会 評議員、理事
—	—	日本癌治療学会 評議員、理事
平成9年(1997年)11月～ 平成12年(2000年)3月	62～ 65歳	東亜大学大学院院長
平成11年(1999年)4月～ 平成13年(2001年)9月	64～ 66歳	日本赤十字社和歌山医療センター院長
平成13年(2001年)10月～ 平成20年(2008年)3月	66～ 73歳	奈良県立医科大学学長

平成15年(2003年)6月1日	68歳	誠之館同窓会総会において記念講演 「教育と生命『オスラー卿と貝原益軒に学ぶ』」
平成15年(2003年)11月	68歳	Karl Storz 賞
平成19年(2007年)4月～	72歳	奈良県立医科大学理事長
平成20年(2008年)4月	73歳	奈良県立医科大学名誉教授・特別顧問
平成20年(2008年)6月25日～ 平成23年(2011年)	73～ 76歳	iPSアカデミアジャパン株式会社社長
平成21年(2009年)8月	74歳～	医学教育賞・牛場賞(日本医学教育学会)
平成21年(2009年)11月	74歳～	SIU Felix Guyon Medal (国際泌尿器科学会)
平成23年(2011年)～	76歳～	iPSアカデミアジャパン株式会社相談役
平成23年(2011年)6月27日	76歳	瑞宝中綬章
平成23年(2011年)11月～	76歳～	天理医療大学学長

学業・業績

泌尿器病態学、とりわけ泌尿器腫瘍学の分野において、患者の詳細な観察に基づいた緻密な疫学的・生化学的研究手法に加え、近年の分子生物学的アプローチにより、泌尿器生殖器癌の発生要因の解明とその早期診療・新しい治療法の開発などに関し、世界をリードする多大な功績を挙げた。

初期の業績として、表在性膀胱癌の再発を繰り返す患者でのトリプトファン代謝異常の可能性を指摘、次に手描友禅職人らに対する広範囲な疫学調査と動物実験及び生化学実験を展開し、ベンチジン系アゾ染料の人に対する膀胱発癌の証明を行った。

これらの一連の研究は日常臨床と基礎研究とが直結した独学的なものであるとともに、癌の予防につながる研究として高く評価され、昭和55年(1980年)には京都新聞文化賞を、昭和60年(1985年)には高松宮妃癌研究基金学術賞を受賞してゐる。

その後、分子生物学的手法を用いた遺伝子レベルの解析方法が不可欠であることにいち早く着目し、尿路上皮癌の Ha-ras 癌遺伝子の変異の発見やp53癌抑制遺伝子の解析などにより数々の先駆的業績を挙げてきた。

このことにより、平成9年(1997年)11月3日紫綬褒章を受章した。

京都大学退官後、山口県下関市東亜大学大学院長として、東亜大学、及び大学院の発展に貢献し、ついで日本赤十字社和歌山医療センター院長をつとめ、その後、奈良県立医科大学学長をつとめる。

「人の話をよく聞く」

奈良県立医科大学学長 京都大学名誉教授 吉田修（昭和28年卒）

私は1953年(昭和28年)本学を卒業いたしました。私の高校時代は昭和25年(1950年)から昭和28年(1953年)までですが、太平洋戦争によるダメージはまだ完全に癒えておらず、私自身この戦争に原因する様々な影響、経済的なこと、精神的なことなどあり高校時代のあまり楽しい思い出はありません。1年浪人の後、京都大学医学部に入学、昭和35年(1960年)に卒業しました。専門は泌尿器系の癌を中心とする分野です。

高校時代から世話になり、面倒をかけた同級生には東原聖坤君、濱田富雄君、京大時代を通しての友人である田中喬君らがいます。

昭和35年(1960年)以来、平成9年(1997年)退職まで、2年間のアメリカ留学を除いて約35年間京大におり、そのうち約24年間教授として、診療に研究にまた教育に従事しました。京大病院長を2期務め、退職後も山口県のある私立大学大学院の学長を2年半、また日赤和歌山医療センターの病院長も2年半つとめました。平成13年(2001年)10月から奈良県立医科大学の学長をつとめております。

長い間医師をやり、また医学教育に携わってきたものとして、最近の医療不信には心を痛めておりますが、日頃思っていることの一部を書かせていただきます。

作家のなだ・いなださんは、慶応大学医学部を昭和28年(1953年)に卒業された精神科医です。インターン終了後、医師の免状を取ったものの自信が持てず山口先生という内科の教授に相談に行き、「医者をやめようとおもいます。自分は医学の勉強はせず、フランス語ばかり夢中になってやってきました。自分のような者は藪医者にしかなれず、こんな人間が医者をやったら患者に迷惑がかかるとおもいます」といいました。山口先生は「そんなこといわずに医者をやれ。藪医者をやれ。名医は世の中にそんなに必要ない。100人に1人か2人でいい。あとはおのれ知ったる藪医者でいい」、そして「藪医者のコツとして一番重要なのは、患者の話をよく聞くことだ。よけいなお説教をしなくて、患者の話をよく聞いてやれ・・・」といわれました。なださんは、これを人生を左右する出会いだったといっています。

20世紀後半、わが国の医学界では「根拠」、「統計」そして「科学性」が強調され、「根拠に基づく医療 evidence based medicine : EBM」が流行語のようになり、またまく間に人口に膾炙するところとなりました。それまでも臨床疫学的手法を用いた医療が研究され実践されていましたが、EBMというわかりやすい言葉の魅力で広く行き渡ったといえます。たしかにEBMは医療の科学性をたかめたといえます。

しかし、医療はそれだけでよいのかという反省から「物語と対話を重視する医療 narrative based medicine : NBM」がEBMにたいする補完的な意味で提唱されてきました。患者さんが自ら語る「ナラティブ」を重視し、対話を臨床実践に生かすことは医療で忘れてはならないこ

とです。話をよく聞くことは一種の癒しにもなるのです。

イギリスの調査ですが、医師は平均すると患者さんの語り(ナラティブ)を18秒でさえぎる、しかしもしも患者さんが引き続き語ることを許されても、物語全体は平均286秒しか続かないということです。この事実は医師がいかに患者さんの話をよく聞かないかということと、語りをうまく引き出さないと患者さんは医療上必要な情報を系統立てて話せないということを物語っております。

プライマリー・ケアにおいては、初診時患者さんの話をよく聞くことで7~8割の診断は付けられ、そして身体の診察をすることで5%、一般的検査をすることで5%正診率があがる、専門的な詳しい検査をしないと診断ができないのは10人に1人くらいしかないとわれています。

最近IT化が病院においても進み、電子カルテなどが普及しております。この時代の変化で、患者さんの話をよく聞き対話を重視し、一人一人がそれぞれの物語を生きているのだという意識を持たない医療者が増えるのではないかと憂慮しております。

人の話をよく聞くこと、対話を大事にすることは医療に限らず人生において大変重要な、しかし当たり前なことではないでしょうか。どうもこの頃、この国では当たり前すぎるほど当たり前のことが、そうではなくなっているような気がしてなりません。 (出典1)

研究分野:泌尿器腫瘍学、泌尿器生殖器癌の発生要因の解明と治療法の開発。

学会・委員会等役職名(主たるもの)

日本泌尿器科学会:元会長、元理事長、名誉会員

アジア泌尿器科学会:名誉会員

日本医学教育学会:名誉会員

日本癌治療学会:元会長、名誉会員

日本癌学会:元評議員、功労会員

日米癌協力事業委員会委員

日本学術会議会員(第15期、第17期)

学術審議会専門委員(厚生労働省)

先端医療センター再生審査委員会委員長(財団法人先端医療振興財団)

財団法人 ルイ・パストゥール医学研究センター評議員

出典1:『誠之館創立百五十周年』、113頁、福山誠之館同窓会編刊、平成17年2月

2004年10月6日更新:経歴●2005年1月28日更新:肩書・写真を追加・経歴・本文●2005年2月23日更新:本文●2005年4月14日更新:経歴●2005年7月11日更新:本文・出典●2006年5月8日更新:タイトル●2006年5月30日更新:連絡先(削除)●2008年2月18日更新:経歴・本文●2009年7月8日更新:経歴●2009年7月10日更新:経歴●2009年7月13日更新:著書●2010年11月16日更新:経歴●2012年2月23日更新:経歴●2012年3月14日更新:経歴●2015年9月12日更新:経歴・レイアウト●